第３回高知県社会教育委員会（平成 31 年４月１日～平成 33 年３月 31 日任期）会議概要

令和２年２月５日（水）13:30～16:00
高知県庁西庁舎２階　教育委員室

１　開会（13:30～13:40）
高知県社会教育委員長挨拶

２　議事（13:40～16:00）
テーマ：地域全体で子どもたちの成長を支える社会教育のあり方について
～「厳しい環境にある子どもたち」を社会教育の視点から支える方策～

（委員長）
それでは協議を始める。
まずは協議１として、令和２年度高知県社会教育団体への補助金について、事務局より説明をお願いします。

（事務局）
〈資料に基づき説明〉

（委員）
ふるさと教育振興事業費補助金の財源はどこにあるのか。

（事務局）
一般財源から捻出している。

（委員長）
他に質問や意見等はないようなので会議を進める。
平成 29、30 年度の社会教育委員会で提言として挙げた内容についての進捗状況の報告と、今年度の本委員会で挙がった意見の中で、来年度の事業に反映することができているものについて、事務局より説明お願いします。

（事務局）
〈資料に基づき説明〉

（委員長）
資料４にもあるように、自然体験学習の拡充が実現している反面、地域の学び場はゼロ査

定となっていることや、ネウボラについても、教育という切り口で連携をしていくことができるのではないかということのあたりに、提言をまとめていく上で、協議を深めていく必要があるとともに、改善の余地があると感じている。

資料５をご覧いただきたい。これまでの協議の内容を踏まえ、私のほうで情報の整理と骨子の案を考えてきたので紹介する。

〈資料に基づき説明〉

意見・質問等があれば自由に発言をお願いします。

（委員）

発達上のアンバランスを抱えている子どもたちは、好ましくない行動をとった場合に目につきやすく、好ましい行動をとった場合にも目につきづらいという傾向がある。結果として虐待に繋がってしまうケースも多い。できないことを叱るのではなく、できているところに目を向けることが虐待のリスクを下げることにも繋がる。

また、目の前の現実から何を学ぶかということも求められており、例えば、濡れることが苦手な子どもに対し、「手を洗いなさい」と指導するのではなく、理由を認めた上で必要な支援が何かを考えることをしなければならない。そうした子どもたちを特別に扱うのではなく、そうでない子どもも含めて支援していくことのできるの体制づくりが必要ではないだろうか。

（委員長）

厳しい環境にある子どもたちをどう捉えるか、ということですよね。厳しいと一括りにしているが、その中には経済、発達上の問題、親子関係など様々な理由があることを理解すること。そしてその子どもたちをどう支援するか、という視点の持ち方を柱の一つとする必要がある。「あるべき論」ではなく、目の前の現実を認めるところから始めなくてはいけない、ということですよね。「親プロ」が広がりをみせているのは喜ばしいことではあるが、質についても考えていかねばならないですね。

（委員）

「厳しい環境にある子ども」を考えるとき、経済状況、発達状況など、本当に厳しい環境にある子どもたちにスポットがあたるが、子どもは皆厳しい環境にあると言える。それは、生きにくい社会の中で取り残されがちになるためである。

学校教育において、インクルーシブ教育が推奨されているが、学校の中は授業という枠組みもあり、思い切り長い時間をかけて何かをする、ということができない現状があるので、社会教育の立場から思いっきり何かをさせてあげることが求められている。

学校教育以外のフィールドで子どもたちを支えていくには、地域の人から褒められる場があるということが大切だと考えている。特に自然体験型学習では、子どもたちは純粋な分、

様々な反応をしながら学び、成長を遂げていくので、自然と褒められることも多くなるのでそうした場を有効に活用するべきである。以前は動物を飼育している学校も多く、動物と一緒に育っていくということもあったが、今はほとんどの学校で飼育はしておらず、自然体験型学習の中でそうした部分も補完することができたらいいのではないだろうか。

地域学校協働本部事業については、もう少し補助金があれば活動の幅も広がるのではないか。

（委員長）

子どもたちの「したい！」という気持ちに応えるということですよね。子どもにはやりたいことが本当はたくさんあるけれども、なかなか実現しないのも現実なので、そこに答えきるよう、アレかコレではなく、アレ“も”コレ“も”という姿勢が大切ですね。

（委員）

自然体験に連れ出すことの良いところは、家庭や学校といった子どもたちを取り巻くヒエラルキーから一時的に解放してあげることで新たな環境に置かれた子どもたちが、「よし、がんばろう」とやる気を出すところである。そうした部分を運営側が理解し、参加した子どもに何かひとつでも成功体験をさせる。そうすることで、どんな自然体験型学習であったとしても、うまく成功させることができるのではないだろうか。

今、幅広い年代の子どもたちを集めての自然体験型学習を実践しているが、その中には異世代間交流の中で様々な学びを経験してもらうほか、たくさんの中に自分もいるんだよ、ということを感じてもらいたいと思って活動している。こうした活動の問題点としては、様々な学校に呼びかけても、学校行事のほかにも習い事などが忙しいということなどから、なかなか子どもの参加がないということである。

また、厳しい環境にある子ども達をどう考えていくかという点では、特別に扱うのではなく、インクルーシブ教育のスタンスで接することが大切に思う。

（委員長）

フラットな関係の中で、自分たちでつくった物差しの中で様々な経験を積んでいくのが社会教育の姿ですよね。そうした場にたくさん集まって欲しいが参加できない子どもも多いのが現状ですよね。

（委員）

我々が行っている事業にも子どもたちを対象としたものがあるのだが、子どもを通じて大人が学ぶこともたくさんあることを体験の中で気づくことがあり、次年度から新たにキャンプ体験の実施を計画している。子どもと大人の両方の気づきや学びが得られるような場を整えていくことが重要であると理解しているので、既存の他の団体とも連携していき

たいと考えている。
　また、市町村における社会教育委員をサポートし、活気づけていくことで、様々な市町村や団体との連携もよりよいものになっていくのではないだろうか。

（委員長）
　社会教育主事や社会教育士のほかに、各市町村の社会教育委員や公民館長など、そうした方々をもっと繋げ、励ますことで、より繋がりが生まれ、機能していくということですよね。そうしたことなどを、つながりサポートづくりの部分に書くことができないかということ。
　また、ここまでに多くの委員から宿泊体験やキャンプといったワードが出てきておりますが、そうしたプログラムをもっと増やしていくということも大事かもしれませんね。
　日常的な生活体験が不足している中で、キャンプのような事業の需要は高まっている一方で、安全性の問題などによりやれる条件が後退してしまっているという背景もありますよね。

（委員）
　自分の子どもが小学生の頃、7 泊 8 日のキャンプに参加したことがある。全てを自分たちで考えて行動しなければならない環境に身を置いたことで、子どもには多くの成長が見られた。一方で、他の事業に参加した際には、「自分たちで考えることがなかった」と口にすることがあった。あくまで一例ではあるが、自身の経験の中で多くの子どもたちと接してきたが、子どもは誰しもが、自分たちで自由に考えて何かをやってみたいとする気持ちを持っているように感じる。子どもを信じ、思いっきり何かをさせてみるということで子どもたちは大きく成長するのだと学んだきっかけだった。

（委員）
　昔は川で釣った魚を自分たちで火を焚いて焼き魚にして食べるというようなこともあったが、今は火をつけることがまず許されない。子どもたちには、自分の経験の中で成功や失敗を積み重ね、「次はこうしよう」といった気づきを得ることが大きな意味を持つのだが、今の子どもたちは、「こうしたらこうなるから駄目なんだ」と先の先まで釘を刺されてしまい、想像することもできなくなってしまっている。
　また、子どもは大人を見て育つわけだが、地域に出ないまま大人になり、大人になっても地域の自治活動や学校の活動などには参加せず、自分の周りのことだけで周囲を見ようともしない保護者も一定数いる。そういう方に限ってトラブルが起きたときには人のせいにする傾向がある。そうしたことに対してなにか支援をすることはできないだろうか。
　自分たちの子どもの頃は習い事ひとつとってみても、自分で自転車で通っていたものだが、いまは大人が連れて行くのが一般的で、子どもを地域に引っ張り出すにはまず親をなんとかしなければならないと思う。

（委員長）
　委員が仰るように、やってみないと分からない、というのは社会教育に非常に重要な視点ですよね。
　循環ですけど、地域に出ないまま大人になってしまうとそうした弊害にも繋がってしまうという例ですよね。今回は子どもをどう支えていくか、ということですので、そうならないためにどうしたらいいのかを考えていくということですね。
　厳しい環境にある子どもたちほど、そうした背景から伝えたいこともうまく伝わらないんですよね。

（委員）
　様々な問題があると考えられると思うんですよね。子ども自身の抱えている問題や親だったり、相手を思いやるということ自体ができない。他にも相手の言っていることの理解ができないであったり、親切心に気づくことができないであったりと、様々な可能性がありますね。

（委員）
　就学援助率やひとり親世帯、生活保護率の高さなど、高知県を取り巻く環境にはネガティブな面も多くあるが、ひとり親世帯であっても積極的に PTA 活動に参加してくださる家庭も多く、こうした現状がそのまま足かせになっているとは感じていない。ただし、社会の中には、社会教育活動は余裕のある人がやればいい、といったスタンスの方が多くいるのも現状に思う。そうした社会を変えていくには、我々が常々声を上げていかなければならないと感じている。

（委員長）
　今回の提言のフレームとして、委員の仰ったような背景について、社会にはやる人がやればいいとする人が多い中でも、社会教育の重要性を真剣に見つめている人がいる、ということは盛り込まなければなりませんね。
　できていない人が駄目というわけではなく、厳しい環境にありながらもなんとか社会を変えようとしている人もいるわけですよね。そういうところに援助していく。

（委員）
　ひとりの子どもに対し、ここまでが教育でここからが福祉というふうにセクトをはっきりと分けてしまっている市町村もあるように見受けられるので、セクトを争わずに子どもの発達を保障していくため、互いの分野の良さを出しあうことが重要ではなかろうか。

（委員）
　学校で起きている子どもたちの状況は、乳幼児期に気になっていたこととその多くは重なっている。そのような状況で、子どもたちの自己肯定感を高めていくための場をどう創っていくか、ということを学校の教員と連携をとりながら検討している。
　褒めることは自尊感情を高めることに繋がるが、そうした理解を学校だけでなく地域に浸透させていかなければ、知らない間にネグレクトしてしまっていたということにもなりかねない。放課後児童クラブなどの活動の中にもそうした部分を取り入れていくことで、地域に意図が浸透していくのではないだろうか。高齢者の感心の高い事柄として、防災と子どもがある。そうした年代の広がりにも期待ができる。高齢者には、地域で子どもたちを育てるという意識が高いので、そうした力を借りていくことも有効である。
　他にも福祉の活動からも社会教育に繋げていく方法はあるように思うので、応援していきたいと思う。

（委員長）
　これまで子どもたちを支援していくための福祉の捉え方が少し狭くなっていたかもしれませんね。委員の仰るように様々な分野に広がっている福祉と繋がっていくやり方もあるのではないかということですね。

（委員）
　養護施設などで行っている取組があっても、施設の利用者には、周りに知られたくないという気持ちがあり、届けたいところにうまく発信できていない現状もある。
　普通の家庭で経験すべきことを経験していないまま大人になり、家庭を持つ者もいるが、すぐに破綻してしまうケースがある。そうならないために、地域の中で、普通の経験をたくさん積ませてあげたいと考えているが、うまく伝え切れていないのが課題であると感じている。

（委員長）
　養護施設などにはなかなかうまく伝わらないとうのはありますよね。本当はそういう子どもたちにこそ届けたいことであっても、なかなかうまくいかない。生活体験とかそういった部分からそうしても離れていってしまうわけですよね。その部分をうまく繋ぐことができないか、ということを考えるのも重要な柱ですよね。

（委員）
　家族はいても家族で本来経験するような経験を積むことができていない子どもたちもいる。そうした子どもたちに家族を感じられるようなプログラムができたらいいと考えている。

（委員）

ある男の子が彼女から「親に口うるさく干渉されること」を相談され、男の子は彼女に「それでも関わってくれる方がいいじゃないか。自分は何するにもひとりでしなさい、と言われて育ってきたけど、こんなに住みにくい家はなかった」と口にしたという事例があった。その話を男の子から聞いたとき、男の子がそうした考えに至るまでに、地域で何かできたのではないかと感じたことだった。もっと地域でそうした部分を支える方法を考えなければ、大人になってから生きづらく感じさせてしまう。

（委員）

東京では家族留学制度というものがあり、他の家庭で生活をすることで一般的な家庭の生活を体験してもらうというものである。

（委員長）

先ほど委員から、地域で何か手を差し伸べることができたのではないか、とご発言がありましたが、他にも NPO など、枠にとらわれない考え方で、持続的な事業を何かひとつでも考えることができないか。

次回は提言案の検討を予定している.

以上で協議を終了する。

３　閉会

生涯学習課長挨拶